

【書評】

Nahid Aslanbeigui and Guy Oakes, *Arthur Cecil Pigou*

New York: Palgrave Macmillan, 2015, x + 309 pp.

本書は A. C. ピグーの経済思想を包括的に扱った英語圏では初めての研究書であり、『経済学の偉大な思想家たち』シリーズの1冊として刊行された。近年ケンブリッジ学派についての関心が高まるなかピグーも徐々に注目されるようになってはきたものの、以前から経済学史研究におけるピグーには、マーシャル、ケインズ、スラッファ、ロビンズ、コースら「主役」たちの「引き立て役」としての二次的な位置が与えられてきた。そのような文脈では、ピグーの人物像および経済思想が「誤解」されていることを著者らは問題にしている。

この「誤解」を解くために、著者らはピグーの著作、参加した委員会のレポートや証言、書簡等の膨大な資料を用いて、ピグーの人物像およびその思想体系を描き出す。本書は全8章からなり、前半では「厚生経済学」体系の確立およびその内容が解説され、後半では主に1920年代～40年代になされた他の経済学者との論争を通してのピグーの経済理論の発展に焦点があてられている。

導入的な1章に続き、2章は8章前半と合わせてピグーについての優れた伝記的研究であり、ピグーの生い立ちやハロー校およびケンブリッジ大学での学びの様子等、興味深い内容が多く紹介されている。特に、ケンブリッジ大学の教授選挙においてマーシャルがピグーを後任に選んだ理由についてはこれまで

も様々な指摘がなされてきたが、著者らはマーシャルが『原理』の思想の継承と独立したばかりの経済学トライポスの発展を期待してピグーを選んだという点を重要視しており、それを裏付ける資料を数多く提示している。

続く3章および4章ではピグーの厚生経済学の体系化とその政策への応用が扱われている。まず3章では関税改革論争を通してピグーが経済政策分析の体系をどのように構築したのかが示される。著者らは「厚生経済学の三命題」の内容が関税改革論者批判のなかにすでにみられることを指摘し、その着想が『富と厚生』（1912年）、『厚生経済学』（初版1920年）で体系化される過程を描く。3章の『厚生経済学』の内容解説はピグーの厚生経済学体系が簡潔に整理・紹介されており、わかりやすい。4章ではピグーの実際の経済政策分析が検討される。著者らは、ピグーの特徴を「方法論的実践主義」と「史実性」に見出す。特に史実性という側面はこれまでの研究において見過ごされてきた重要な点であることを強調している。

続く5～7章は理論的分野における同時代の理論家との間の論争を扱う。5章は費用論争を扱っており、6章はロビンズによる厚生経済学批判を受けたピグーの反論の内容を検討している。7章は、雇用理論をめぐってケインズとの間でなされた論争が取り上げられ

る。著者らはピグーの初期からの思想が『産業変動論』（1927年）および『失業の理論』（1933年）に結実する過程を追い、1930年代のケインズとの論争を経たピグーの雇用理論を検討する。ピグーがケインズによる批判をどのように受け止めたのかという点に関する著者らの立場は、ピグーはケインズによる批判のうち、方法論的批判は受け入れたが、理論的批判は最後まで受け入れなかった（235-38）というものである。評者の問題関心に照らして最も興味深く読んだのは本章であり、内容に関連して以下の点を指摘したい。

まず、『一般理論』出版後になされたケインズおよびカルドアによる批判に対するピグーの応答に関してである。論争は「貨幣賃金率の引き下げは（利率の低下を経由することなく）雇用量を増やすのか」という点を中心になされたが、ピグーはカルドアの批判を受けて、賃金率が低下することで雇用量が増加するのであれば利率は低下することを認めた（1938年）。著者らはこれについて単にピグーが『定常状態の経済学』（1935年）の時点ですでに時間選好率は所得に依存すると述べていることを指摘するにとどまっている。貨幣賃金率引き下げによって雇用量が増大する過程で利率が低下することを認めることがピグーの経済学体系においてもつ意味について何らかの言及があればよかったように思う。

続いて、いわゆる「ピグー効果」に関してである。著者らはピグーが実質残高効果の議論を用いて自身の議論を「補強した」としている。パティンキンの整理に由来するいわゆる「ピグー効果」の解説としてIS-LMモデルを用いた説明がなされることもあるが、そのような枠組みを用いた紹介はピグー自身の意図およびピグーが本来主張したかったことに沿っているとは言い難い。これに対して著者らは原典に沿った記述を行うことで、ピ

グーによってこの内容が提示された経緯を明らかにしている。しかし、ここでの提示はピグー自身の記述の要約にとどまっている。「ピグー効果」がピグーの理論体系に占める位置について何らかの示唆がほしかった。

ケインズの『一般理論』の登場以降、ピグーは実物と貨幣を統合したマクロ経済モデルの構築を模索することになったが（これが著者らのいう「方法論的批判を受け入れた」の意味であろう）、新しい方法を用いつつ、内容としては以前からの自らの主張を再度確認しようとしたピグーの経済学体系は、結局のところどのような全体像をもつものだったのか。ピグーの原典に忠実に、これまでの誤ったピグー像を正すという著者らの目的ゆえ本章のような叙述スタイルになったのだらうと想像されるが、ピグー自身の記述からもう一步踏み込んだ著者らによる整理が提示されるとよかつたのではないだろうか。

上述のようにピグーの経済理論についての「誤解」をとくよう努めた著者らは、最終章でピグーの人物像についても「誤解」を解こうと試みる。ピグーの晩年は「隠遁者」と評されることがあるが、著者らはピグーがその生涯を通して隠遁者などではなかったことを明らかにする。また、晩年のピグーが悲観主義的になった原因をケインズ革命をめぐるケンブリッジ大学内の内輪もめと1930年代を経ての政治不信に求めている点が興味深い。

本書の最大の特徴・研究史への貢献は、すでに高見氏によって指摘されている（*Journal of Economic Literature* 54(1), 2016, 240-42）とあり、著者らの丹念な資料調査にある。「脇役」としてのピグー研究ではピグー自身の思想をとらえきれないという問題意識はピグー研究者の多くが共有している。本書では、若き日の理想と希望に燃えたピグーが様々な困難を経て現実に失望しながらも、経済学体系の精

緻化こそが社会の改善に役立つと信じて邁進してゆく姿が、著者らによる膨大な資料の研

究によって見事に描き出されている。

(吉原千鶴：立教大学)